

魅せられて綴る藩文学（十四）

藩学「四教堂」と先哲

勝間田 三千夫

（会員 佐伯市中村北町）

第三節 東上の旅

（一）南豊の顔子江戸を行く

淡窓、弟子を教育すること三十有余年、ここに至って束修を取る者約二千人に及ぶ。その中に於いて、「咸宜園第一の才子と称すべきは中島子玉なり」といつている。

中島子玉、名を大賚と改め、号を米華と称して東上した。勿論藩費を以ての遊学であったことは、藩校の学制によって明らかである。が、学習期限の上からは既述のように、中士以下の子弟は八歳より十九歳まで文武を研修せしめ、二十歳より仕途に就くと定められている。しかし、子玉が咸宜園を大帰する時、既に二十一歳であったことからみれば、別格のはからいによる藩命を背負った遊学であったと思われる。学問に献身的な藩主は、藩

校の儒官育成のため、最高位の官学「昌平校」に推挙したのである。他の小藩にも見られるように僻辺の地にあり小藩は、太平の世にあつてその影は薄く、幕府の目には殆どとまらなかつた。かつて寛政の文学三侯の一人、八代高標侯が蔵書家として偉名高く、佐伯藩は全国六十余国に知られていたことから見ると、正しく汗牛充棟の宝典に代わつていま、哺み育てられた中島米華を以て、世に示さんとする意図が伺えるのである。

さて、米華中島大賚は文政五年（一八二二）秋二十二歳の時、藩命により江戸昌平校を目指して出発した。南豊の風をひっさげて、意気揚々として自分をつめる未来への旅立ちか、はたまた他国に連なる山々高く、谷深くとも越えねばならぬ使命を背負った旅立ちであつたか、佐伯を発して三原室津より山陽道を経て、大阪から淀川を遡航して東海道に出で（当時、東海道を上下するのは大きな旅であつた。京都と江戸の間を往くには六七日の泊りを重ねなければならなかつた。）天竜川を過ぎ大井川を渡り箱根へと、道中詩を賦しつつ、かくして江戸に着いたのは初冬の頃であつたらうか。

では、目指す昌平校とはどのような学校であつたのか。

(二) 昌平校遊学

昌平校は、正しくは昌平坂学問所である。略称して聖堂ともいう。学問所は、幕府の儒官たる林家に於いて建てる所であった。そして本来は、幕府に直属する旗本の子弟教育機関であったのが、松平定信の寛政の改革に当たって、時の大学頭林述斎や、いわゆる三博士柴野栗山、尾藤二州、古賀精里等によって改組され、従来の寄宿寮の外に新たに書生寮が設けられて、幕臣達の寄宿に対して、書生寮には、諸藩より選抜せられて到った青年達を置く所となった。いまその経過をみると、

『御触書天保集成』の聖堂並学問所によると、寛政十年二月に大目付に宛てた書に

「今度聖堂御主法相改メラル。御目見以上以下ノ子弟御教育コレ有ルベキ為、学問所夫々御取建ラレ仰付候間、寄宿候トモ又ハ通候トモ、勝手次第修行アルベキ候。」

また同年七月には、松浦耆岐守が御勘定奉行へ宛てた書に

「今度聖堂御普請仰出ラレ候ニ付、御用相勤メタキ趣キ相願ワレ候。(略)」

普請のため奇特、手伝い、上納金が課せられている。

同年八月には松平加賀守より御目付、御使番への書には、

「昌平坂聖堂御普請コレ有ルニ付、当時小屋場モ出来候。一体惣構モ是迄ヨリ広ク相成候間(略)」

よって普請中の防火に勤められるようにと達している。

寛政十二年三月に至って、大目付に宛てた書には、

「学問ノ儀ハ御代々御世話遊バサレ、就中、元禄・享保ノ間厚ク御引立遊バサレ候。今度学問所ニ於テ御教育コレ有ル儀ノ条々、人々相励候様致スベク候。尤文武ノ道一致之事ニ候間、武芸ノ儀モ心掛怠ルベカラザルノ儀、勿論ノ事候。」

また、この月再び大目付へ宛てた書には

「此度昌平坂学問所御普請出来ニ付、当夏中ヨリ兼テ御仰出ラレ候通り、御家人ノ輩御教育コレ有ルベク候間、学問修行ノ志コレ有ルモノ共ハ、勝手次第入学有ルベク候。委細ハ林大学頭並御目付小長谷和泉守、羽太庄左衛門且尾藤良佐(二州)、古賀弥助へ承り相申スベク候。」(略)

以下学問所の定日講釈並に日講にも、勝手次第罷り越すようにと触れている。

そして、同年四月

「学問所稽古ノ儀、後目見以上並以下共通候テ学候儀、勝手次第ニナスベク候。部屋住厄介等ノ内、修行ノ志厚ク、寄宿候テ稽古イタシタク願ヒ候モノモ候ハバ、其ノ意ニ任スベク候。通ヒ稽古並寄宿願ヒトモ、林大学頭且掛リ御目付並儒者ノ内エ申通士候上、自身学問所ノ玄関へ罷リ越シ、姓名短冊差出シ申スベク候。但、寄宿願ヒノ儀ハ尾藤良佐、古賀弥助ノ内エ得ト承合候テ勝手次第ト挨拶ノ上、短冊差出シ申スベク候。通ヒ稽古寄宿共、頭支配へ伺ヒ候様ニテハ手重ニ成リ候間、人々ノ了簡次第、直ニ申込候テ挨拶コレ有ル上、一通リ頭支配ニテ承リ置キ候様致スベク候。稽古所ニテ夫々定日相立、且毎日素読モコレ有リ候筈ニ候。稽古ノ為学問所へ相越シ候モノハ、イヅレモ羽織袴ニテ苦シカラズ候。三千石以上寄合ノ面々タリ共、供人省略、手輕ニ往来勝手次第ナスベキ候。」

こういう幕府の奨励の結果稽古人が急増し、当然教官の手不足をきたした。享和元年（一八〇一）八月、大学頭兩儒者はこの実情を訴え、その結果書生寮の設置が認め

られた。そして寄宿寮の育英資糧百三十人扶持のうち、三十人扶持を書生寮の用にあてることになり、昌平校の学制および諸施設はことごとく備わり、名実ともに幕府教学の中心として確立され、その教育は直參に限らず、広く諸藩の俊秀を集めて、藩学の教官を養成する最高学府の実をそなえたのであった。またそのことは、諸国の牢人の篤学者にまで余恵を及ぼすことになったのである。

書生寮は南北に二棟があり、四十余名の人員を収容することになっていた。入寮するには官儒の紹介を必要とした。しかし満員で直ちに入寮のしかねる場合は、先ず、官儒の門人となって、欠員の生ずるのを待たねばならなかった。

又、書生寮は南北二寮とも長さ十四五間に幅五間の長屋で、共に八畳と六畳との間に分かれたれていた。

八畳には三人六畳には二人入り、室内を紙屏で二分三分して、八畳の間の方は、外に向かって二人が列んで席を取り、その後に新入生が居ることになっていた。新入生は先輩に付随しているので、頭使にも甘んぜねばならなかった。先輩に退寮者があつたことに、順次席が繰り上

がって行くのである。

そして北寮には会堂、食堂、庖厨、浴室があり、食堂は輪講や会読の会場にも兼られていた。又、両寮とも四方に縁側があり、中頃に廊下があつて南北を通ずるようになってゐる。

書生寮には自治制が施かれていた。学業が優秀で徳望もあり、在学して既に年を経ている者が舎長に挙げられて、寮中一切の事務を担任する。尤もこれに助勤が二人あつて、舎長を補佐する。舎長には五人扶持、助勤には三人扶持が支給せられていた。舎長ともなれば、学生ながらも権力があつた。

賄いは、官給の炊夫が二人いてこれにあたる。また、米塩薪炭等の諸費は、寮生が二人ずつで月々交代して帳簿に記入し、月末に決算する。この月算掛には、在寮一ヶ年に及ぶとその当番が廻つて来ることになつてゐた。毎月一人ずつが交代して、新旧の二人がそれにあたる。

課業は、官儒と両三名によつて、定日に講席が開かれるのであるが、これはさしたることもなく、もともと書生寮は自修を主としていたので、寮生同士が輪読、会読などを催し、それによつて相互に切磋して、実力を養う

組織だつた。

図書は毎月出納の日が決まつていて、一時に各人二三部ずつ借りられ、それでも書物には不自由はしなかつた。外出は毎月十回を限つて許される。

米華がいた時の昌平校の儒官は、古賀侗庵・依田であつた。毎月一回この二先生の臨席があつて、寮生一同は講堂に参列する。その時舎長が傍らに在つて、検閲の印を捺す。それが済むと圖によつて人をきめて、当たつた者が『経書』二三章を講ずる。それに対して寮生が互いに意見を述べ、議論を上下して儒官の批判を仰ぐ。寮生中の最年少者二人が茶番となつて、講席には列せず茶を煮て、儒官に勧める。

寮生の褒貶黜陟(評価)は、舎長が助勤と議した上で、掛員儒官に具状して處決する。

書生寮には在学期間はなかつた。但し規則の上では一年を一期とした。なお在寮したい者は、改めて願ひ出るのである。在寮三年に及べば、三旬の休暇を賜つて帰省することが許される。在寮生は一年にして去る者が多かつたが、中には十年内外も在り、年齢の四十を超してゐる老書生すらもいた。

書生寮の生活は、大体かくの如くだった。寄宿寮の学生とは、ただ春秋二回の詩会に際して講堂に一座するのみで、殆ど何等の交渉はなかった。以前は同一に遇せられたのであるが、旗本の士と各藩の士とは、互いに相容れないものがあつて、ややもすれば争論に及んだりする。それでは幕臣達の威厳にも係わるというので、隔絶せしめたのであつた。それで書生寮は書生寮として、一つの別天地を成していたのである。その位置は、現在の東京医科歯科大学の敷地であつたという。

当時、江戸の学界の中心は、官学昌平校の学長林述齋（五十五歳）であつた。

述齋は幕府の学制改革に熱心に協力した人で、昌平校の改革によつて、より多数の学生、より一般的な身分の学生も収容しようとする努力、また述齋自身は大名家に生まれたが、林家を継いでからは三千五百石を領し、貴族的気質の所持者であつた。

あの寛政の三博士と言われた柴野栗山、古賀精里、尾藤二州の諸老儒は、文化年中に既に没し、当時昌平校教授の任にあつてゐたのは、古賀侗庵であつた。

侗庵は古賀精里の第三子に生まれ、江戸にあつて八歳の時から柴野栗山、尾藤二州の薫陶を受け、文化六年二月、二十二歳で擢んでられて儒員となり、父子並んで昌平校の学政を薫育した人で、時に三十五歳であつた。

文政六年（一八二三）米華二十三歳、昌平校に入校し、古賀侗庵の門下生として、天理を基として説を立てる、程朱の学説を修めるのである。

（注）米華はこの年五月五日には、既に入校していたものと思われる。淡窓に宛てた書状が、文政六年六月二十三日に届いている。「得中島益多江戸書。」なお、書面の日付と思われる「以正月五日発」（遠思楼日記）とあるが、正月ではなく五月の活字ミスと思われる。飛脚は一月あれば十分届くからである。

書中はさだかではないが、昌平校入学の知らせと、恩顧に答えて、研学の決意を述べたものと推察する。

侗庵の兄古賀毅堂とは、米華が咸宜園に在る、文政四年六月二十五日肥後遊学の時、佐賀にあつて既に面識も

あり交誼もあつただけに、夙に侗庵に知られ、眷遇を蒙つたものであらう。

時の昌平校祭酒林述斎は、あの寛政の学制改革を断行した、老中松平定信と極めて親しく、祭酒になつたのも定信の指名によるものと言われている。松平定信には天明七年六月十九日、老中職に就任するまで部屋住の頃、自己研究の文教政策の一試案として、諸侯の教養を取り上げ、時代と人とを有機的に把握意企して文通した書簡集がある。その中に、教養に値する諸侯の一人に毛利高標を見ることが出来ることから、佐伯藩は夙に知られていた。また、松平冠山侯、冠山は鳥取藩支藩、因幡新田藩五代藩主池田定常のことで、松平姓は藩主の時に、叔父池田清定に分封して家号を与えられたことによる。この松平定常(冠山)・佐伯藩主八代高標(霞山)・近江仁正寺藩主市橋長昭(黄雪)を併せて、寛政の文学三侯と称し、著名な好学者であつた。

米華は為に、ことの外厚遇されたと思われる。しかし、この頃松平冠山はすでに隠退して専ら著作に従い、刊行事業を起こして諸書を出版し、教学の深化と普及に貢献していたころであつた。

因みに定常(冠山)は、享和元年に隠退している。この年は、佐伯藩では八代高標が没し、また中島子玉が生まれた年である。

近江仁正寺藩主市橋長昭も、文化十一年に四十二歳で没し、世代は早や弟子達に交替し、好学の風は諸藩士民に影響して、文教の振興は文化・文政・天保以降の隆盛に極められたのである。

この文化文政期の漢学者の一人に、肥後熊本出身の松崎慊堂がいた。

寛政の三博士の後、この頃に至つては江戸の佐藤一斎、京都の頼山陽を東西の大関、安積良斎を東の関脇、斉藤拙堂西の関脇と並び称せられた程であつた。これらの儒家の後に出来るのが、東の大関松崎慊堂、西の大関猪飼敬所、それに安井息軒・塩谷宕陰で、師に劣らぬ名手であつたと、いわれている。

松崎慊堂は、肥後国益城郡木倉村の農家に生まれた。幼時より秀才で、十歳のとき父の意で僧とされたが、彼は儒を志し、十五歳のとき江戸に走り親族を訪ねたが許されず、ついに浅草の称念寺に飛び込んだところ、住職玄門がその才を愛し昌平

校に入らせた。居ること数年、林述齋もまたその才を認め家塾に入れたが、その門下に佐藤一斎が在り、互いに切磋して学業は大いに進んだ。

享和二年（一八〇二）掛川藩の教授となり、機密に参与した。

文化八年朝鮮使対馬来聘（来訪）にあたり、述齋の請いにより共に応接に当たった。肥後藩主は憐堂を自藩に復したいと掛川藩に乞うたが、憐堂はこれを辞退した。文化九年羽沢に隠居して、石経山房といった。その学の深く操守高く、交誼厚く聞達（出世）を度外視して、高踏（高い理想）一也に鳴った。

憐堂の著書多く、中でも文政六年より弘化元年まで、死の直前十九年間の日記「憐堂日曆」は、思想史上の貴重な資料とされている。

文政六年といえは米華が昌平校に入校した年であり、時を同じくして、この年からつけた日記ということになる。

米華は昌平校に入校するや書生寮に在り、戯れに賦した詩「美人十二詠」が絶倫となし、一時に伝誦されて名

を都下に喧伝せしめた。その事を付記して「此子玉在東都時作。一時伝誦以此知名実非其至者。姑節録之。」とある。

この美人十二詠は篠崎小竹の作を見て、その題目により身体を十二に分けて、美人の艶麗を極めたもので、米華の代表的作品である。師古賀侗庵は「之ヲ小竹ニ比スルニ、勍敵相当ルト称スルニ足ル。」と評している。

この作品は、病に伏せる米華に対し、旧知の友は久能山下の蓂子を饋つて、左記の如くいっている。

この昌平校に儒学を志す者は、屋椽を走る飢臘の影さえ照らす薄い粥飯を啜つて、毎日瓜や茄子や大根ばかりの枯禪に似た乏しい粗食も、官命の勤めを第一に美食となし、甘んじて学業に励まなければならぬ。官遊の厳しさ、将しく書生の業そのものであった。

書生寮にあつて戯れに賦したこの詩は、丁度この頃米華は病に臥せて頗る瘦せていた時の作で、同僚の石井子耕が見舞つて、久能山に穫れた乾蓂一筐を饋つてくれたお礼の作であった。

この石井子耕は伊豆下田の人で号は繩齋、米華

より十六才上、後文政十一年駿州田中藩に仕え
儒人となり、藩校日知館の教授となった。

このほか同じ道を歩む者に、佐賀藩校弘道館教
官となった武富南（一八〇八〜一八七五）。伊勢
津藩校有造館の講官となった早崎巖川（一八〇
五〜一八八六）。肥前島原藩の参政稽古館の岡山
藩教授となった川北温山（二七九四〜一八五三）
他、阿波の斉藤鑿山（一七八五〜一八四六）等
がおり、その多くは諸藩から抜擢されての昌平
校遊学であった。

史跡湯島聖堂 昌平坂学問所

